

目次

ミャンマーの放生
1

漂流船
80

ボートは沈みぬ
142

道祖神の口笛
174

あとがき
276

ミャンマーの放生



一

赤錆におおわれた線路が湾曲しながら木々の間を通り抜けている。蔓のからまった広葉樹の枝に大型の鳥が止まり、午前の空気を切り裂くような声で鳴いていた。

地面から五十センチほど高いだけのプラットホームに十数匹の犬が群れている。隈本信夫はかれらを見て「いやだな」と思った。噛まれて感染でもしたら大変なことになる。日本を出るときに予防注射をしなかったことが悔やまれた。

「ちよつと怖いな。ミャンマーには狂犬病があるのかね」と、現地雇いの男性ガイドのムミンに尋ねた。

「ありますよ。気を付けてください。お犬さまたちを刺激しないようにね」

ムミンの日本語は巧みだが、どこか変なところがある。が、いつもユーモアを欠かさない。それが彼の頭の良さを感じさせた。隈本の狼狽ぶりが伝わったのか、彼は白い歯を見せて笑っている。

「冗談ですよ。少しあなた様をおどかしたのです。ごめんなさい。この犬たちは病気を持っていません。皆おとなしいですから安心してください。彼らは駅の警備員さんのようなものです」
その駅の名は「インセイン」である。呼称の意味はわからない。ヤンゴン市の西の郊外に位置し、軍事政権によつて「反政府」のレッテルを張られた政治犯の多くを収容した刑務所があることで知られている。

線路を囲むバナナの木が石造りのホームに小さな日陰を作っていた。小さいザックに入れてきた俳句歳時記の中に「万緑ばんりよく」という季語があるのを思い出しながら、隈本は一眼レフのカメラをぶら下げて、間もなく来るはずの列車を待った。

ミャンマーの一月下旬は熱帯雨林気候の乾季にあたる。日中の気温は三〇度まで上がり、時折、驟雨が過ぎて行く。人々は傘を持つこともなく、半袖姿でゆっくり歩いている。

隈本はバナナの葉の向こうの青い空を仰いでいた。目の前に広がる熱帯の景色を何とか一行の

詩にしてみたい。そう考えながら、しきりに言葉をさがした。

犬だけでなく鳩もホームの上に群れていた。日本の神社や公園で見かけるドバトよりも小型かつ細身に見える。原種のカワラバトに近いのではなからうか。

到着する列車の乗客らを当て込んで、パンや果物を売る女たちが木陰を出てホームに座り始めた。犬たちがその食物をにらんでいる。その背は強い日差しを跳ね返して頑丈そうに見えた。

——噛まないから安心と言われても、犬とは元来が吠えたり噛みついたりするものなのだ。

隈本は物売りの女たちにカメラを向ける間も落ち着かなかった。「熱帯の朝の挨拶バナナ売り」「野の犬の背に日差あり滴れり」と手帳に書き込んだ。

ムミンはそんな隈本の姿をにやにやしながら見つめていた。彼は三十代の頃にヤンゴン大学の市民向け語学スクールに通い、ガイドの職を得たという。十五年間、絶えず自分の日本語に磨きをかけているそうだが、日本に行ったことはない。彼は単身旅行の隈本と行動を共にして四日目であり、打ち解けた雑談をする間柄になっていた。

その一ヶ月前まで心臓病のために入院生活を強いられていた隈本は、ヤンゴン入りした初日から陽気な観光客になろうとした。熱帯の気候の中で、鬱陶しい気分から自身を解き放ちたかった。彼は街に出るなり、露店で民族衣装のロンジーを買い、その場で身に付けた。寺院の参詣の折に

は、「エイツ」という袋物を売店で買い、肩から懸けて歩いた。そんな隈本の好奇心あふれる行動をムミンはおもしろがり、「ミャンマー人に見えますよ。でも、ちよつと太いかな」と軽口をたたいた。

首都の機能はネーピドーに移ったが、ヤンゴンはいまもこの国最大の商都である。中心部に日本人が経営するホテルがあり、隈本は二週間ほど逗留するつもりでチェックインした。そこに入りする旅行会社の専属の日本語ガイドがムミンであった。

昨日の午前、日本から六人組の旅行者が到着した。隈本はバスツアーに合流させてもらい、動物園や博物館を訪ねた。二日目のこの日は朝から鉄道の体験乗車と駅構内のカメラ撮影が組み込まれていた。

団体旅行者は「西日本旅行作家協会」というグループ名だった。その中の「鉄道研究班」を中心にミャンマー旅行のチームを編成したという。列車の試乗だけでなく線路沿いを歩いて古い犬釘を拾ったり、機関車・車輦の修理工場を見学するという念の入ったメニューが組まれていた。それはいかにも鉄道好きの人々の集団であった。

この国はかつてビルマと呼ばれていた。英国の植民地だった一九世紀、南北に細長い国土の中央を貫く鉄道が敷設され、良質なチーク材や鉛、タングステン、雲母などをさかんに搬出した。

女性はその一割ほどだという。これは由紀子の質問への回答だった。

インセン駅に戻ると、やって来たディーゼルカーを隈本が指さし、「またも日本製だ」と高い声を上げた。行き先を示すプレートには「気仙沼」と書かれていた。

由紀子は胸を弾ませて乗り込む自分を意識した。どうやら旅行作家たちの「鉄ちゃん」気分に感染したらしい。我ながらおかしさがこみ上げてきた。

四

車内の椅子は旧国鉄のボックス式であり、元は日本の大船渡線を走っていたものらしい。そこには昭和の匂いが絡みついていた。

由紀子はムミンと斜めに向かい合い四人分の席を占めた。隈本は通路を挟んだ隣のボックスに一人で腰かけて煙草をくゆらしていた。

ディーゼルカーは線路の両脇から覆いかぶさる緑をかき分けて進む。それはいかにも緩慢であり、すぐに隣の駅がやって来た。由紀子は都電の箕輪―早稲田線の乗り心地を思いながら、ニッパ椰子で葺いた屋根がまばらに展開する逆景色を眺めていた。時折、隈本の視線が由紀子の上に

注がれる。視線を返すのが煩わしかった。

停車することに乗客が増えていく。やがて、座席が埋まり、通路も混雑した。男も女も一様にロンジーをまとっている。それは江戸小紋を思わせるような多様なデザインであった。

由紀子はその柄の一つひとつに興味深く見つめ、自分も露店で買い求めたくなった。しかし、隈本のようにあつかましく着て歩き回るつもりはない。その行為は見方によっては民族衣装を茶化す態度なのではないかと思った。



車内はにぎやかである。マンゴーやバナナなどの果物、ウズラの卵を売る者が行き来し、サトウキビを何本も担いで売り声を発する女性もいた。彼等は薄い木製のテーブルを頭に寄せ、注文を受けるたびに手際よく品物を下ろした。そして、頭の頂から出すような高い声で代金を受け取っていた。

ムミンが高齢者の男二人に座席を譲るのが見えた。それが当然のような顔つきで座る男たちは遅しく日焼けし、布製の小さな四角い帽子をかぶっている。二人とも口の中に何かを含み、しきりに顎を動かしていた。

由紀子の隣に赤ん坊を抱いた若い母親が座った。帽子の男がその母親に何か言い、赤子を自分の両腕に引き取った。顔を崩して、しきりに赤子に呼びかける。車中に笑いの渦が広がった。

素朴ではあるが、いたわりの気持ちがあふれている。由紀子の胸に温かいものがこみ上げてきた。赤ん坊は目を大きく開けて小さな声で唸っている。乗客たちは赤ん坊をたらい回しにしては、抱き上げてあやし続けていた。

隈本の席の向かいには若い女性が座った。ロンジーではなく黒いスカートを着用している。隈本が「ミンガ・ラバー（こんにちは）」と言うと、彼女が小さい声であいさつを返した。

それを聞いた高齢の男が何か言い、周りを見まわしながら笑い声を上げた。その歯が赤い果汁

道祖神の口笛



一

古い話である。一人の青年が仙台市の商家の二階八畳間で寝ころがっていた。長い戦争のさなかの昭和十九年六月上旬のことであった。階下のラジオから「鈴懸すずかけの径」の曲が流れていた。

南側の窓から城跡が見える。まばらな石垣が若夏の陽光を跳ね返している。首藤善介は「寝ていてもしょうがない。新緑の中でも歩いてみるか」と呟きながら、だるい体を引き起こした。

彼は東北帝大の学生である。四年越しとなる肺浸潤症は快方に向かっている、と自分では思う。しかし、微熱がいつも下がらない。深夜に咳き込み、痰の中に血が混じることもあった。

午後から近辺一帯で行われる防火演習は欠席するつもりだ。身を寄せる親戚の家の亭主は隣組

の連合会の班長を務めるが、善介の病弱を気遣ってうるさいことを言わなかった。

彼は法文学部の文科独語クラスにいる。数え年で二十四歳なので老学生のうちに入るだろう。それは胸部疾患のために中学校と私大予科で病気休学したためだった。

彼の実家は東京芝区にある。正金銀行に勤める父親が宮城県岩沼の出身であった。一昨年、父は「空気のいいところで、学問でもしていたらいいだろう」と彼を郷里に送った。

幸いなことに、東北帝大は旧制高校の卒業生でなくとも受験資格を与えていた。善介はそれなりの勉強をして合格を果たした。仙台市の老舗の家具商に嫁いだ叔母を頼って下宿させてもらっている。

彼は元柳町の下宿から片平町の大学まで通うのに、いつも少し遠回りする。市街地の西を蛇行する広瀬川の岸辺を歩くのが好きだった。二高出身の父が蜂の意匠の古い帽章を送ってくれた。それを布製の鞆に付けて歩き、此の地の学生生活に仲間入りした気分になっている。

病身ながらも帝大生になった自分の姿が嬉しくもあり、一方では、非常時に成人男子として一人前の貢献ができないことに一抹のやましさも感じた。

街を吹き抜ける風が東京のそれよりも爽やかである。時折、海の匂いが運ばれてくる。彼はそれが自分の胸部の疾患に良い影響を与えるものと思ひ込んでいた。

長袖シャツに腕を通しながら、彼はため息をついた。今月中に専攻科目を絞り込み、学部事務所に届ける決まりだが、本腰を入れて何を学ぶべきなのが判然としてこなかった。

第一、学業に集中できるような日々ではない。戦争の行方が重大な懸念だった。大本营発表では「連戦連勝」だが、大陸の戦線は十年以上も続き、欧米列強を相手取る太平洋、インドシナ方面の戦線も、開戦時のような勢いはない。戦死者の増加と物資の欠乏が容易ならざる事態を物語っていた。

前日に追廻河原で火器操練があり、この日は休講日である。午前九時、彼は学生服に巻脚絆の姿で下宿を出た。岩沼の祖父母のところへ顔を見せに行くつもりだ。読みかけの和辻哲郎著『ニイチエ研究』と軍用水筒を鞆の中に入れた。肴町の和菓子店「卯月」に寄り、大町横丁から芭蕉の辻へ抜け、市電の狐小路に向かった。

芭蕉の辻は城下町のほぼ中心にある。奥州街道と大町通りが交差し、江戸時代には忠孝顕彰の札や切支丹禁制の御触書などが掲げられたという。四隅の白壁櫓やぐらのうちの一つだけが今に残り、戦時色を映したポスターが貼り出されていた。

「撃ちてしまむ」「欲しがりません、勝つまでは」「一億総火の玉だ」……。大袈裟で空虚な標語が、却って皇国の切迫した実情を物語っていた。二年前の翼賛選挙以来、政治家たちは軍部



の言いなりであり、戦争指導に盲従しているとしたか思えなかった。

善介が腹立たしく思うのは、学問の世界への圧迫が露骨になったことだった。東京、京都の帝大では高名な教授らが自由主義思想を非難されて退職に追い込まれた。東北帝大でも配属将校の姿が目障りだった。教職員や学生の動向を監視し、読書の傾向にまで探りを入れる特高の私服警官も出沒した。

思想の自由への圧迫に対して義憤を感じながら、善介は「今、自分がやるべきことは学問である」と念仏のように繰り返した。が、実のところは自己の生への焦燥感が募るばかりであった。

兵員不足を補うため、昭和十六年十月から大学、高専の繰り上げ卒業が実施された。さらに十八年六月、「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定された。同年

秋には、文科系大学生の徴兵猶予が停止された。

それは卒業予定に関係なく臨時徴兵検査を行い、年末までに入隊させる強硬な方針だった。その噂は以前からあり、大学の教職員らは戦々恐々としていた。実際に通達されると学内は騒然となった。東京では十月二十一日、文部省主催の出陣学徒壮行会が挙行された。仙台でも数日を置いて宮城野練兵場にて同様な儀式が行われた。

善介もその隊列に加わったが、「丙種合格」「病氣療養中」の彼は大学に通い続けた。入営する繰上卒業組の学友に申し訳ない思いが募った。

法文学部の講義は大幅に削減された。学生たちは分散して軍需工場での勤労奉仕に出かけた。病身の善介も週二回、鉄砲町の工場に出かけ、第二師団第四連隊の野砲部品の修理と研磨の作業に従事した。

この五月初めに学内が再び騒然となった。文部省が「勤労即教育」の方針を打ち出し、「学校報国隊」制度なるものを構想中だという。大学当局も抵抗しきれないだろう、というのが級友らの一致した見解だった。彼は全身を縛られるような窮屈感を覚えた。

頭上には若夏の爽やかな空があるのに、強まる一方の戦時色を怨まざるを得なかった。彼は学帽を目深にかぶり、市電の降車駅から国鉄仙台駅へと歩いた。弁当代わりに二個ずつ買った大福